

《研究報告》

阿武隈川における漁業の推移と漁協の役割

高野 岳彦*

1. 川をめぐる意識変化と河川漁業研究

河川の漁業はこれまで、民俗誌や市町村史の民俗編などに伝統漁撈が記載されることはあっても、地理研究の対象とされることは少なかった¹⁾。これは、その漁獲量が日本の総漁獲の1%に満たず食糧供給に担う意義が小さいことと、生産地の河川も全国に広く分散して明確な主業地域を形成していないことから研究の対象とされにくかったことが要因と考えられる²⁾。もともと距離が短く急流の多い日本の河川の生物資源包蔵力は高いとはいえ、それゆえ河川漁業の生産力を地域の主な生業の地位にまで高めることは困難な条件にある。

しかしその一方で、河川漁協の組合員数が沿海漁業の従事者数よりはるかに多いことは意外といわねばならない。1998年11月実施の第10次漁業センサスによれば、全国の海面漁業経営体数は15.1万、自営漁業就業者数でも20.2万人であるが、河川漁協の組合員数は59.2万人にも上っている。つまり、河川漁業の一般的な性格は、広く薄く分布する水族資源を、多数の人が、非生業的すなわちレジャー的に「楽しみ」として採捕する目的で営まれるものということができる。非生業的であることがまた、地域研究の対象にされにくかった要因ともいえる。

他方、日本の多くの河川の魚族資源は人為放流によって支えられており、それなくしては「楽しみ」としての漁業さえ維持することができない。この放流事業の主たる担い手は河川の漁協であるが、河川漁業者とともに河川漁協の存在と役割もまた、これまで地域研究でとりあげ

られることはほとんどなかった。

しかし近年、親水意識と水辺環境再生への取り組みの高まりをうけた河川法一部改正(1997年)によって、河川整備における環境重視への転換が規定され³⁾、また生物多様性への関心の高まりともあいまって、川や湖の在来生態系の回復への取り組みが地域の関心を呼んでいる。さらには、小中学校への「総合的学習の時間」の導入(2002年)によって地域の河川が人と自然の「総合的な学習」の対象として各地で着目されて、川は地域の環境文化を知るよりどころとされる機会が増えてきた。加えて、河川流域が自治体間の連携軸として取り上げられるようになってきた⁴⁾。そして、これらにかかわる報道に、河川漁業関係者が登場する機会もまた増えてきた。

このように、河川への意識と関心が高まってきた今日、河川生態系の直接の利用者である河川漁業者とその維持管理を担う河川漁協の活動に目を向ける地域研究の必要もまた高まってきた。そして河川漁業は、食糧生産としての意義は小さいけれども、人と川とが最も直接的にかかわる営みであるという点で、その実態と地域性を、河川資源管理者としての漁協の役割とともに把握しておくことが必要になってきていると筆者は考える⁵⁾。

本稿では、その手始めとして、阿武隈川をとりあげて、河川漁業に関する基礎的統計を整理するとともに、漁業資源の維持主体である漁協の役割について福島県の阿武隈川漁協を例として報告する。以下、次章で阿武隈川漁業の統計的検討を行い、次いで3章で、福島県阿武隈川漁協の資料によって河川漁業の推移と漁協の業務の現況を整理する。それらをふまえて、最後に

*東北学院大学文学部

河川漁業の問題点と研究視点について考察する。

2. 阿武隈川漁業の統計的検討

(1) 全国主要河川との比較

はじめに、漁業生産量からみた阿武隈川の地位を他河川との比較で確認する。2000年の全国主要河川の漁獲量をみると(第1表)、各水産資源は、北日本の河川に集中するサケと特定少数河川で漁獲されるシジミ・ワカサギの「特化」型と、北海道を除く全国の河川で広く漁獲されるアユ、コイ、フナ、ウナギなどを「普遍」型とに大別できる。このうち、サケとシジミの漁獲は主に河口部で行われ、沿海漁協が行っている場合もあって、他の河川漁業とは性格が異なる。これに対して、河川漁業の全国的主役は何と云っても溪流のアユ釣りであり、遊漁(釣り)の主対象でもある。アユ釣りのスポットは、北海道を除く各地の川に形成されている(アユ釣りステーションwebサイト; 釣り東北社, 2004)。また表からは、冷水性のマスとイワナは、北海

道を除く中部以北、いわゆる「東山」地域の諸河川で主に漁獲されていることも読み取れる。

一方、阿武隈川に着目すると、漁獲構成の上でサケが多くはないことから、北日本型というよりも「東山型」の川といえる。また漁業生産量では、流域面積の広さを念頭において他河川と比べてみると決して多いとはいえず、それほど漁業が盛んな川とはいえない。これは、阿武隈川は同規模の他河川と比べて溪流魚の生息場所となるべき山間の清流を持つ大支流が少ないことや、福島盆地南方の峡谷に昭和10年に発電用ダムが建設されて天然アユの遡上がせきとめられて、それより上流部にアユの好漁場が形成されにくかったことが影響しているとみられる。

(2) 1970年代の漁業者の漁業従事状況

河川漁業従事者に関する基礎統計としては漁業センサスの内水面漁業編がある。このうち、第5次(1973年)と第6次(1978年)の2回に限って、河川漁業者の漁業従事状況に関する内容が河川・水系別に調査されて公表されたが、第7次

第1表 全国主要河川の内水面漁獲量(2000年)

	計	さけ類	にじま す	いわな	わかさ ぎ	あゆ	こい	ふな	うなぎ	しじみ	えび類	流域面積
十勝川	563	563										9 010
天塩川	472	410			0		1	1		59		5 590
石狩川	854	692	0	0	101		1	1		7	5	14 330
北上川	624	187	2	16	1	59	10	8	2	220	0	10 150
阿武隈川	336	14	23	9	0	82	87	28	1	0		5 400
最上川	493	23	7	26	1	126	67	42	1		5	7 040
阿賀野川	259	32	5	25	11	38	15	7	0	58		7 710
久慈川	567	6	1	1	0	333	64	46	11		0	1 490
那珂川	2 191	73	53	12	0	457	118	11	5	1 269	1	3 270
利根川	4 943	7	77	38	25	249	879	512	64	1 418	39	16 840
荒川	499		4	10	1	40	68	134	13	32	4	2 940
相模川	915		20	4		490	167	79	2	0	2	1 660
信濃川	1 090	57	43	89	0	220	144	154	5		2	11 900
天竜川	445		10	24	0	291	23	4	1		0	5 090
木曾川	776		11	76	1	277	56	19	8	113	1	9 100
長良川	647		1	5		314	31	48	14	58	6	
揖斐川	615		2	5		131	65	109	13	165	8	
淀川	388		4	1		234	57	45	2		0	
紀ノ川	358		4			301	5	4	1			1 750
江の川	334			0		191	18	4	7			3 870
吉野川	708		1	1	0	325	12	26	14	185	1	3 750
四万十川	515		0			266	11	1	56	0	31	2 270
筑後川	1 290				7	189	118	124	78	258	25	2 860
球磨川	608					432	45	23	21		0	1 880
全河川計	44 123	12 187	392	489	198	10 206	3 183	2 212	630	4 242	166	

農林水産省統計表

第2表 1970年代における阿武隈川水系の河川漁協正組合員の漁業従事状況

	正組合員総数	年間漁業従事日数別				販売金額別(万円)						漁業種別(延べ数)			
		29日以下	30~89日	90~149日	150日以上	5万円未満	5~10	10~30	30~50	50~100	100以上	投網	他の網	釣り	その他
1973 水系計	7,012	4,519	2,202	253	38	6,354			458			2,040	331	4,529	112
宮城県															
白石川	329	235	69	25		285			44			58	1	270	
阿武隈川	105	82	20	2	1	102			3			45	56	4	
福島県															
阿武隈川	5,397	3,279	1,878	206	34	4,998			399			1,719	185	3,405	88
広瀬川	192	185	5	1	1	190			2			45	1	145	1
移川	120	94	20	5	1	120						5	9	105	1
大滝根川	455	385	59	10	1	452			3			14	1	437	3
釈迦堂川	174	85	89			168			6			21	55	80	18
社川	240	174	62	4		239			1			133	23	83	1
1978 水系計	8,753	5,371	3,022	306	54	8,433	155	100	40	18	7	2,228	415	6,096	131
宮城県															
白石川	229		209	10	10	229						80		170	
阿武隈川	379	154	195	30		269	50	45	10	5		41	354	70	10
福島県															
阿武隈川	6,704	4,089	2,331	244	40	6,534	86	44	24	10	6	1,868	45	4,701	90
広瀬川	238	230	6	2		231	3	2	1	1		49		187	2
移川	148	116	24	6	2	144	2	1	1		1	5		141	2
大滝根川	564	478	73	11	2	549	7	4	2	1		14		545	5
釈迦堂川	216	106	110			210	3	2	1			23	16	157	20
社川	275	198	74	3		267	4	2	1	1		148		125	2

漁業センサスによる。1983年以降、福島県内の阿武隈川の支流別の公表はされなくなった。

以後は河川漁業の生業としての意義の消失ともあいまってか、残念ながら調査されなくなってしまった。本章では、公式統計では唯一漁業従事状況ができる1973・1978両年の漁業センサスから、当時の阿武隈川における河川漁業者の漁業従事状況を瞥見してみる。

このことをまとめた第2表をみると、第一に注目すべきは5年間で約1,700人という漁協組合員数の急増ぶりである⁶⁾。年間漁業従事日数別で見ると、29日以下層と89日以下層でそれぞれ800人

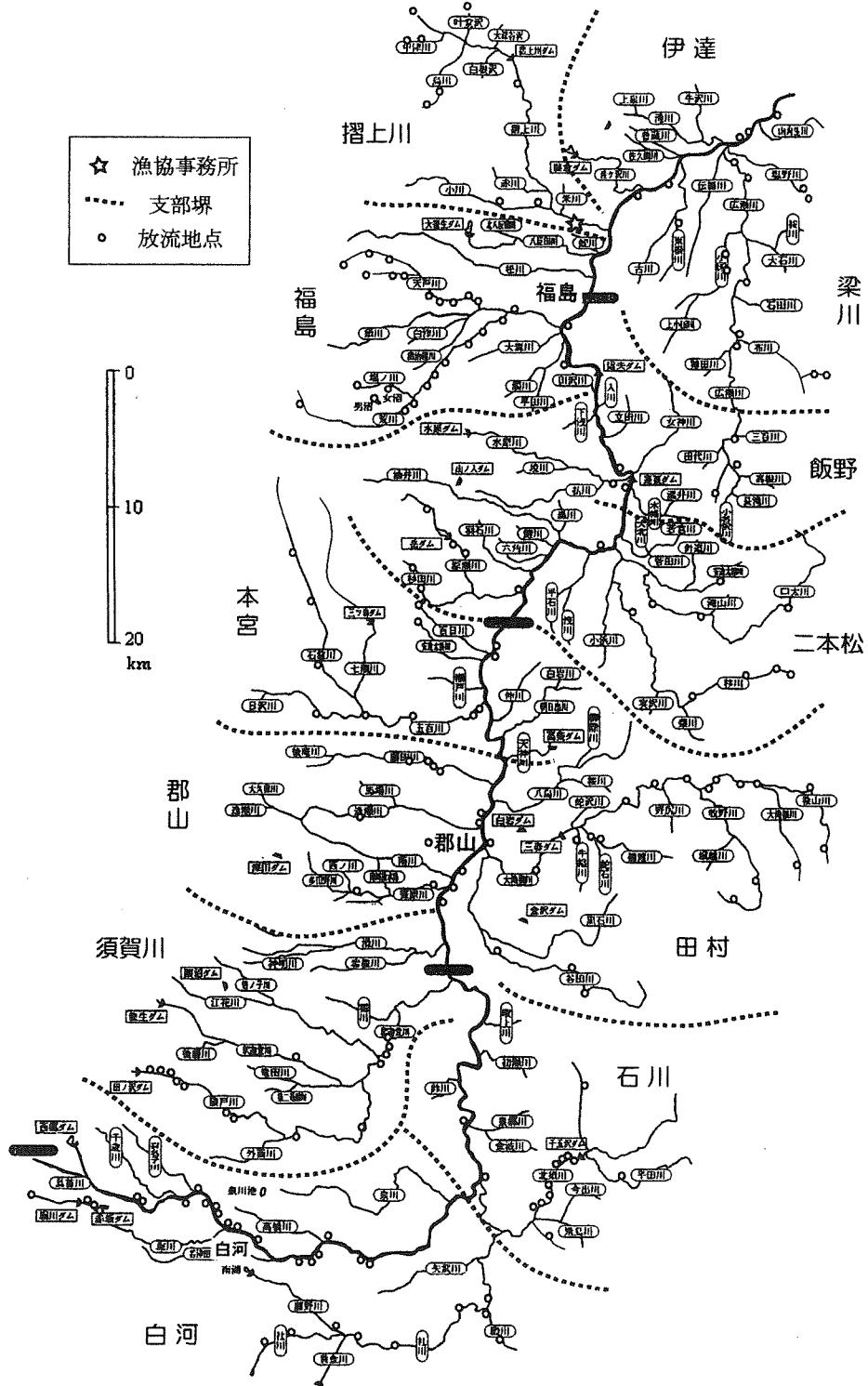
の増加を示し、販売金額別では5万円未満層で1,900人、そして漁法別では「釣り」が1,500の増加を示した。これらは、高度経済成長後の余暇時間拡大時代に入り、レジャーとしての釣りを楽しむ人が急増したことを物語るものであろう。

第3表は、1973年の漁獲魚種別の組合員数が示されている。後章でみるとおり今日の河川漁業の主役はアユであるが、この時期にはコイ、フナ、ウグイ、ウナギなど複数の魚種を漁獲対象としている組合員が多かったことが知られる。水系・支

第3表 1973年の阿武隈川水系河川漁協の漁獲魚種別正組合員数

	正組合員総数	遡河サケマス	陸封サケマス	アユ	コイ	フナ	ウグイ	ウナギ	他の魚類	その他
1973 水系計	7,012	165	354	3,017	3,611	3,767	4,346	770	2,117	206
宮城県										
白石川	329	16	97	198	53	39	82	24	56	
阿武隈川	105	105		91	9	6	60	33		
福島県										
阿武隈川	5,397	44	27	2,642	2,912	3,150	3,387	663	1,674	16
広瀬川	192		10	38	73	134	107	19	141	
移川	120		40		6	2	120	2	26	
大滝根川	455		179	1	364	245	304	19	66	183
釈迦堂川	174				82	113	137	7	52	7
社川	240		1	47	112	78	149	3	102	

漁業センサスによる。



第1図 阿武隈川漁協の事業地域
 漁協資料により作成。放流地点は1997年のもの。

流別では、従事日数や販売金額上位者数からみて「福島・阿武隈川」が最も漁が盛んといえるが、これは飯坂温泉を控えて川漁のメッカであった摺上川を含んでいるためであろう。

4. 福島県阿武隈川漁協にみる河川漁業の推移と現状

阿武隈川水系には、福島県側に1つ、宮城県側に3つの漁協がある。福島県側は県内の阿武隈川水系を漁業権設定区域とする阿武隈川漁協、宮城県側は、角田市以南の本流と丸森町内の支流に漁業権を持つ宮城県阿武隈川漁協、白石川水系に漁業権を持つ白石川漁協、そして非出資組合の蔵王漁協である。以下ではこのうち、福島県の阿武隈川漁協をとりあげ、その業務内容と統計資料の分析を通して⁷⁾、河川漁業の状況をより詳しくみるとともに、漁協の河川生態系維持に果たす役割について整理する。

(1) 阿武隈川漁協の組合員

漁協への加入資格は、「組合地区内に住所を有し、水産動植物の採捕や養殖に年間30日以上従事する人」となっている⁸⁾。2004年度の組合員数は7,079名で、これは福島県内の沿海漁協の組合員数1,745名をはるかに凌いでいる。これは河川漁協では、沿海漁協と異なって、水域に接する集落のみならず、組合地区内の市町村在住者であれば誰でも組合員になれるためである。そのため組合員には、農家のほか企業や公務員の退職者も多くおり、その職業属性に特定の傾向はないという⁹⁾。河川漁協の組合員数が沿海漁協に比べて格段に多いことの要因は、こうした開かれた加入規程に基づく漁業者属性の広範さによっているといえる。

また、組合員にとっての漁業の生業的意義については、かつて摺上川などでは川魚を採取して飯坂温泉の旅館に売り歩いていた人も存在したが、今日では河川漁業を生業とする人は皆無であるとのことで、この点も沿海漁協の組合員とは性格を異にする。こうしたことから現在の阿武隈川においても、漁業は生計を目的とする

第4表 阿武隈川漁協の支部別組合員数および漁業者数

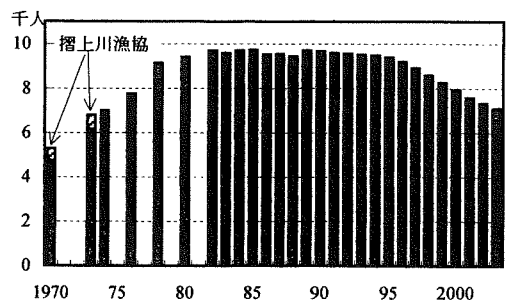
	組合員数	漁業権行使件数	漁法別内訳					
			投網帖	四手	梁	刺網	釜	ませ
梁川	552	379	341	17		6	14	1
伊達	208	146	140			1		5
摺上	517	465	426				8	31
福島	720	399	394	2		1		2
飯野	253	55	55					
二本松	379	153	145					8
本宮	351	206	187		1	1		17
郡山	483	324	302			11	1	10
田村	454	134	132					2
須賀川	864	431	355			24	10	42
石川	1215	459	378			6	26	49
白河	1013	759	673			9	24	53
本部	70	61	61					
計	7079	3971	3589	19	1	59	83	220

※「釜(セン)」とは籠を沈める漁法、「ませ」とは人工的に作った産卵床に集まった魚を一網打尽にする漁法。

※阿武隈川漁協資料(2003年3月)により作成。

漁業者ではなく、川漁を楽しみとして行うことを引き換えに川の資源や環境の整備と維持に参画している人々によって支えられていることが再確認される。

広い流域をもつ阿武隈川漁協では、組合員は12の支部(第1図)のいずれかに属して、支部ごとに組合員としての業務が行なわれている。各支部の組合員数は第4表の通りである。一方、第2図は組合員数の推移を示したものであるが、高度経済成長から低成長期にまたがる1970年代に組合員数が急増している。これは、河川漁業が生業よりもレジャーとして釣りを楽しむ人々の増加によって担われてきたことを傍証するものである。他方で1995年以降、組合員数が顕著



第2図 阿武隈川漁協の組合員数の推移
※摺上川漁協は1973年に阿武隈川漁協と合併。
(県水産要覧により作成)

な減少に転じているのは、組合員の高齢化によるものという。

(2) 漁業権の行使

1) 漁業権の設定と行使

河川漁協は、水生生物の包蔵力の弱い内水面での漁業権（第5種共同漁業権）を免許されている。阿武隈川漁協では、漁業権は8つの魚種（アユ、コイ、フナ、ウグイ、ヤマメ、イワナ、ワカサギ）に対して設定されており、それぞれについて、漁具、漁法、漁業権有資格者の条件が「漁業権行使規則」で細かく定められている¹⁰⁾。これら漁業権の行使件数を既掲の表4に支部別・漁法別に示した。これによれば、漁業権行使件数の組合員数に対する割合は漁協全体では56%という値になるが、支部別には、溪流釣りの好漁場となっている摺上川を持つ摺上

支部で89.9%、源流部の清流がある白河支部では74.9%に上り、逆に阿武隈山地側の飯野、田村、石川の3支部では20~30%台にとどまっている。溪流環境に対応した地域差が推察されて興味深い。

これらの漁業の行使にあたっては、所定の行使料を漁協に納付することになっている。第5表がその内容であるが、これによれば、アユの投網を行う組合員は、組合費4,000円のほかアユ投網の行使料2,000円を毎年支払う必要がある。漁協組合員にとっては、アユの投網漁ができることは、組合費と行使料を支払ってもなお大きな楽しみであるという。

2) 漁獲量の推移

第3図は、福島県内の阿武隈川水系における漁獲量の推移である。全般には、1970・80年代は漸増傾向にあり、90年代にはアユの増加が顕著である。大半が非生業的に行われる河川漁業の漁獲量統計には信頼性の問題があるけれども¹¹⁾、各魚種別の漁獲量の推移パターンは概ね以下の3型に分けられるようだ：

- ・一貫増加…アユ、サケ類
- ・80年代増加・90年代漸減…コイ、ウグイ
- ・漸減…フナ、オイカワ

このうち、アユとサケ類の増加は、放流事業の拡大と関連している。この点を次に整理する。

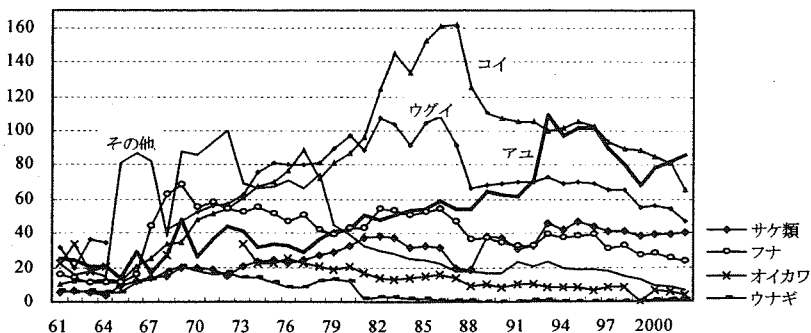
(3) 放流増殖事業

河川漁協は、組合員の漁業生産を高めるための事業を行うことを定款に定めているが、その主なものは放流増殖事業である。河川漁協は、

第5表 組合員の各種料金

		料金(円)
賦課金(組合費)		4,000
行使料	投網およびアユ漁	2,000
	四ツ手網	2,000
	やな漁(1ケ統)	13,000~16,000
	地曳網(1ケ統)	13,000
	刺し網(1ケ統)	8,500
	釜場(1ケ統)	3,200
	ませ漁(1ケ統)	8,500~13,000
新規加入料	アユ有り	10,150
	アユ無し	8,150

阿武隈川漁協による。



第3図 阿武隈川水系の魚種別漁獲量の推移

(福島農林水産統計年報により作成)

第6表 2002年度の目標増殖量，放流予定量，支部別放流量

	コイ kg	フナ kg	アユ kg	ウグイ kg	イワナ 千尾	ヤマメ 千尾	ワカサギ 万粒	ウナギ kg	マス kg	
目標増殖量	4,000	1,500	2,400	20*	56	95	1,000	100	10*	
放流予定量	4,000	1,500	3,000	2,500	70	100	1,000	100	3,900	
支部別 放流量	梁川	400	200	50	100	3	7		10	200
	伊達	150		50	50	0.5				150
	摺上			650		7	8			150
	福島	300		300	150	15	10	500	20	400
	飯野	280			100	10	6		5	250
	二本松	250			100	10	7		5	250
	本宮	150		300	100	3.4	3		5	250
	郡山	200		360	140	6	6		5	300
	田村	350			220	3	14			470
	須賀川	480		360	240	5	12			470
	石川	710	690		340	5	10	500	50	500
	白河	300		1,000	200	8	10			350
	計	3,570	890	3,070	1,740	75.9	93.0	1,000	100	3,740

※ウグイとマスの目標増殖量の単位は「万尾」。阿武隈川漁協による。

漁業権の免許を受ける条件として資源増殖に努めることを責務としており，漁業権の行使と放流増殖事業の遂行とは一体のものである。

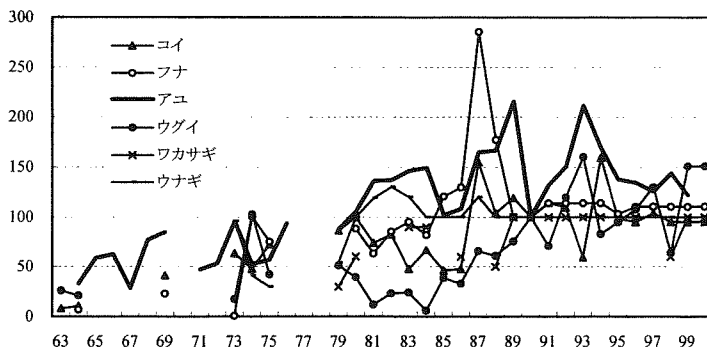
各漁協は増殖目標量と放流計画を毎年定め，その年々の実際流況を勘案して放流する。阿武隈川漁協の2002年の増殖目標量と放流予定量は第6表の通りである。放流魚種と量の決定にあたっては，各支部の組合員数に按分した放流額と，各支部が希望する放流魚種を勘案し，支部別・魚種別に放流量を決める。

実際の放流作業は，1人の漁協専従職員と稚魚を納入する養魚業者とで分担して，以下のような年間スケジュールに基づいて，河川の流況にあわせて適切な日を選んで行われている。

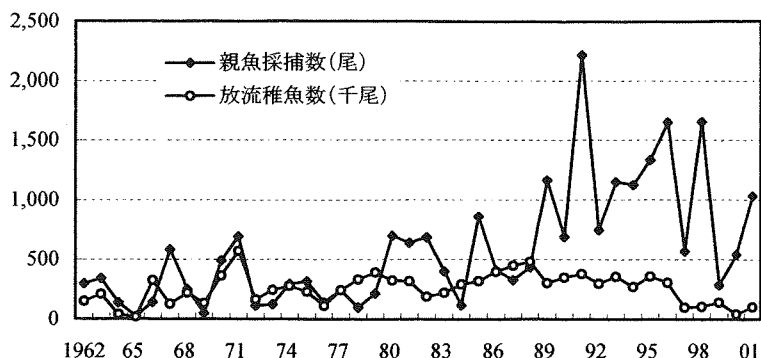
- ・4月…ワカサギ（母畑ダム，土湯男沼）
- ・5～6月…アユ
- ・6～7月…イワナ，ヤマメ，ウナギ
- ・9月…ウグイ
- ・10～11月…コイ，フナ
- ・12～2月…サケ

放流地点は各支部ごとに定められており，25,000分の1地形図に記入されて漁協事務所に保管されている。第1図は1997年に定められた放流地点で，合計174ヶ所がカウントされる¹²⁾。

第4図は，魚別放流量の推移を指数で表したものである¹³⁾。事前の放流計画に基づいて一定量で推移していると予想されたが，意外に年々の変動が大きい。これは，支部ごとに前年の釣



第4図 阿武隈川漁協の放流量（1990年を100とする指数）の推移
（福島県水産要覧により作成）



第5図 阿武隈川漁協におけるサケの採捕数と放流数の推移
(福島県水産要覧により作成)

果や流況を踏まえて要望が出されてきたり、あるいはダム建設の補償金¹⁴⁾によるアユの大量購入・放流などの年々の状況を反映した結果という。

放流する稚魚は養殖業者から購入するが、その費用が漁協事業費の約4割を占め、そのうち最多を占めるのがアユである。アユは、長く琵琶湖の「湖産アユ」を購入していたが、福島県栽培漁業センターがアユ稚魚の生産を始めた翌年の1983年からは同センターから購入し、1992年からは同センターが生産した稚魚を中間育成業者が育成したものを買い入れている¹⁵⁾。その他の稚魚は、民間の養殖業者から買い入れる¹⁶⁾。

(4) サケ人工孵化放流事業

遡上して川に入ったサケの採捕は水産資源保護法で禁じられており、特別に許可されるのは人工採卵・孵化・放流の認可を知事から受けた者のみである。つまり、河川におけるサケ採捕は漁業権漁業として行われるものではない。本州におけるサケ孵化放流事業は、河口部では沿海地区漁協、中・上流域では河川漁協が実施している場合が多く、小規模な河川の場合は任意組合が担っている場合もある。既に第1表にみたとおり、サケ人工孵化放流事業は北海道が中心であるが、本州でも三陸地方や山形県のほか福島県浜通りの諸河川でも盛んで、請戸川と木戸川が本州有数の放流規模を誇っている。これらに比して、阿武隈川ではそれほど盛んであるとはいえないが、河口部の亘理町漁協、丸森町の宮

城県阿武隈川漁協、蔵王南麓の白石川漁協、そして福島県の阿武隈川漁協が、それぞれサケ孵化放流事業を行っている。

サケの人工孵化放流の歴史は古いが、200海里規制をうけて沿岸漁業の振興が叫ばれた1980年頃から政策的に推進され、放流稚魚の40%を県が国庫補助を受けて買い上げる制度となっている。その結果、放流稚魚数と親魚採捕数は1980年頃から急増してきた(サケマス資源管理センターwebサイト)。

阿武隈川漁協では、福島市瀬上の摺上川河畔の漁協事務所に孵化施設を併設してサケ事業を行っている。親魚採捕数と放流稚魚数の推移をみると(第5図)、前者は1・2年おきの増減を繰り返しつつ、1990年代以降急増してきたが、放流稚魚数は97年以降減少している。採捕数の増加はそれまでの放流事業の成果であり、これには宮城県側での放流量の増加も加味されている。他方、放流数のほうは特に1990年頃以降は採捕数の増加と連動してはいくにはみえないが、これは孵化水槽の容量によって孵化卵数が制約されていることと、96年までは木戸川から卵を移入して放流量を維持していたが、97年からは自川卵だけの放流に変更したために減少したものである¹⁷⁾。

阿武隈川漁協におけるサケ採捕から放流までの経過は以下の通りである。サケは10月から11月下旬頃にかけて遡上し、それを採捕者各自が川に仕掛けを作って採捕・選別し、漁協の孵化場

に搬入して未成熟魚は蓄養した後、採卵・受精させる。漁協組合員のうちサケ採捕が行えるのは3万円の賦課金を納付した「サケ部会」員のみであり、2004年度は25名であるが、実際に採捕を行っているのは5名程度という。サケ部会員には1人当たり卵1万粒を納入するノルマが課され、それを上回る分は1粒1円で買い上げ、不足する場合は逆にその分の金額を納入する。1尾から採取される卵は2500粒ほどで、15～16匹分採卵すれば賦課金分の買上金を得ることになるが、採捕したサケがすべて採卵可能な状態にあるわけではなく、漁獲努力量は年によって大きく変動するという。放流稚魚は県が買い上げる形となるため、放流日には県の担当者が検量に立ち会う。

サケ部会員にとって採捕事業の経済的メリットはほとんどなく、彼らは3万円の賦課金と採捕労力をかけてでも、地元河川の環境維持の象徴的な仕事として「楽しみ」で行っているという。遡上サケが商品にならない河口部以外の河川漁協では、もともとサケ孵化放流は営利事業ではなく、県補助とサケ採捕行使料を得ても採卵から放流までの蓄養コストを補いきれない赤字部門であるとのことであった。当漁協のサケ放流事業は、河川環境浄化の象徴としての意義のほうが強いといえる。

(5) 遊漁券発行と遊漁管理

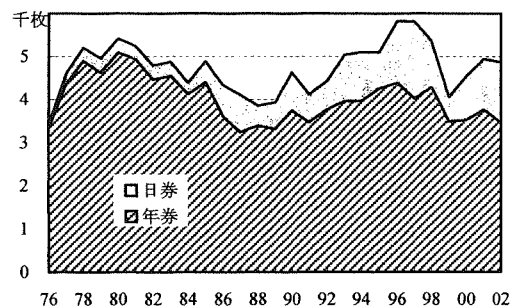
内水面の漁業権（第5種共同漁業権）の免許を受けた漁協は、上記の通り水産資源の増殖を行うとともに、不特定多数が参加する遊漁と河川資源のバランスと秩序を保つために、組合員以外の一般釣り人に対しても規則を設けて遊漁を規制することができる。福島県の阿武隈川水系でも、阿武隈川漁協が定めた遊漁規則と、県が定める上位規定である内水面漁業調整規則によって遊漁ルールを定めている。その内容は、遊漁料の徴収、漁具・漁法の制限、入漁禁止の期間と区間、採捕可能な魚体の大きさ、漁場監視員の役割などである。

阿武隈川漁協における遊漁管理は、支部ごと

の監視活動によって行われているが、広大な流域のためもある1ヶ所の巡回頻度が年1・2度程度と少ない。監視員に遭遇した時に券を購入すればよいと考えている遊漁者も多く、ブラックバスなど漁業権外の魚が釣りの目的であることを主張されると遊漁券の購入を求めにくいといい、ルールへの遵守は遊漁者の良心にかかっている面が強い。

一方、遊漁券の売り上げは河川漁協の重要な収入源となっており、遊漁が決して盛んとはいえない阿武隈川漁協でも漁協予算の3割を占める。遊漁券は年券と日券に大別されるが、年券は主に阿武隈川を恒常的な釣り場に行っている地元住民、日券は外来者や年間釣り日数の少ない人が多い。実際の釣り人の増減は、週末の天候や、釣り人同士の口コミによる釣果情報に左右されるという。

第6図は遊漁券発行数の推移を示したものであるが、90年代以降の日券発行数の増加は、高速交通化と携帯電話の普及で釣り人たちが短時間に広域に流動する傾向が強まったことを反映しているのではないかと漁協ではみている。



第6図 阿武隈川漁協の遊漁証発行数の推移
(県農水部および阿武隈川漁協の資料により作成)

(6) 河川漁協の社会活動

河川漁協は、漁業生産に直接かかわる放流増殖や遊漁管理に関する事業だけではなく、河川をめぐる様々な調整の場に参画している。阿武隈川漁協への聞き取りによれば、これには以下のようなものがあるという。

1) 水利権調整と河川環境の保全活動

まず、阿武隈川の水利権にかかわる多種多様な調整の場への参加がある。主たる水利権者である電力会社や公共団体、土地改良区、他の大口使用者などとの調整会議、それに水利に影響を及ぼすような開発工事が行われる場合の事前調整などである。そのほか、阿武隈川の生態系の保全をめぐる調整の場への参加がある。近年問題になっているブラックバスなどの外来魚の駆除とリリース禁止PR、川鵜による食害対策、流域漁協間の放流の調整などで、これらは国や自治体が主催するものが多い。広い流域を持つ阿武隈川漁協では、1人の専従職員がこうした会合に出席する日数は、年間30日は下らないという。

2) 交流・教育活動

河川漁業にかかわる交流事業としては、サケ採捕の盛んな各地の漁協で恒例の観光イベント化しているものが知られている。しかし阿武隈川漁協では、こうした交流事業はこれまで盛んではなかった。一方で、河川環境に関する地域住民の意識の高まりから、河川漁協が川に関する地域の教育交流の場に参画する機会が近年増えている。阿武隈川漁協がかかわるこうした場として近年知られるようになったものに「阿武隈川塾」がある。これは、当漁協専従職員の発案から、東北建設協会の公益事業の指定をうけて2001年度から始まった体験学習プログラムである。その内容には、10月のサケ採捕から翌年2

月の放流までの体験を中心としつつ、阿武隈川と利水・治水・親水関連施設の見学を交えて、5回にわたる週末の活動が盛り込まれている(第7表)。

この事業には、発案者の漁協職員が塾長として参加しているほか、サケ部会員が実演参加し、河川国道事務所をはじめとする行政関係者も、活動テーマによって随時加わる。これらはいずれも無償の手弁当参加である。この「塾」には、折からの学校への「総合的学習の時間」の導入ともあいまって、年々参加を希望する学校が増え、すべてには対応できない状況になっているという。「阿武隈川塾」は、阿武隈川の環境と生態系の維持に果たす河川漁協の社会的役割を地域に広くPRすることに役立っているといえる。

5. 河川漁業の研究視点：むすびにかえて

本稿では、これまで地域研究ではあまりとりあげられてこなかった河川漁業に焦点をあて、福島県の阿武隈川をとりあげて、その河川漁業の実態と漁業権免許者である漁協の業務を概観した。その結果、生業としての意義を持たない河川漁業の実情を統計で確認した後、漁協組合員の性格、漁協が魚族資源維持に果たす役割、そして近年ますます大きくなってきている河川をテーマとした地域交流活動を、概説的ではあるが明らかにした。それらの知見をふまえて、最後に河川の漁協と漁業の抱える問題点と、今後の河川漁業研究の視点について小考を加えて、むすびにかえたい。

1) 河川漁協の問題点

まず、生産力の低さと非生業的な漁業者が組合員のほとんどを占めるという河川漁協の零細性を第一に指摘できる。東北最大の規模を持つ福島県阿武隈川漁協の場合は事務所と専従職員をもっているが、他の内陸河川の1支流程度程度の小漁協では両方とも持たない場合が多く、資料の系統的な保存もなされていないことが多い。

第二に、その零細性がさらに進行する傾向にある点である。それは、第2図で見たとおり、

第7表 2003年度「阿武隈川塾」の日程

回	月日	内容
		開校式
1	10.11	鮭の採捕を見てみよう。人工授精を観察しよう。親鮭を解剖してみよう。水質って?
2	10.25	水道の水はどこからくるの? 浄水場見学 摺上川ダム見学
3	11.08	水で電気ができるよ! 信夫発電所 みんなの安全は? 防災センター見学 お家を水害から守ろう! 「川」造ってみる?
4	12.13	川からの贈り物(流木アート、ストーンアート) 河原で遊ぼう! 風作り・風あげ
5	2.21	修了式 鮭稚魚の放流・手のひらから太平洋へ 修了証書授与

※曜日はいずれも土曜。塾パンフによる。

1990年頃以降から顕著となっている組合員数の減少のためであり、阿武隈川漁協に限らない全国的趨勢である¹⁸⁾。組合員数の減少は組合収入の減少に直結し、それは放流稚魚の購入費の削減につながる。また、組合員だけでなく、釣り人の全般的な高齢化による遊漁者数と遊漁日数の減少も遊漁券収入の減少につながる。

第三に、他方で河川環境への地域社会の関心が高まってきており、漁協に期待される役割はむしろ増大する。魚道造成などの公的事業が行われて受益・維持主体となるような場合にはなおさら漁協の役割は大きくなる。ようやくその役割が社会から期待されるようになって一方、今日の河川漁協は、もともと零細な組織の縮小というジレンマ状況にあるといえる。この点では、産業としての意味は失いつつも水源地を守る森林組合と同様の事情にあるといえる。

第四に、もともと日本の河川の有用魚族は漁協の放流によって支えられている面が強いが、漁協の縮小による放流事業の縮小は、河川の有用魚族資源の維持に影響を与える。他方、放流がなくなれば「本来」の河川生態系は回復するのだろうか。長期的にはそれは成り立つだろうが、現実には放流量の縮小速度と遊漁者数と彼らの釣果の減少速度、そして一部遊漁者による外来魚リリース自粛努力のバランスによって異なる結果を生むだろう。いずれにせよそれは、縮小過程に入らざるを得ない今後の河川の漁業・漁協と魚族資源との微妙な関係の中で進行するものと考えられる。

2) 河川漁業の研究視点

このように、既に生業としての意義を消失し、縮小過程に入ってしまった河川漁業に人文地理学からアプローチする場合、どんな視点がありえようか。以下の3点から整理してみたい。

①地域性の視点…河川漁業は、全般的には生業としての地位を失っていることが統計上明らかではあるけれども、その地域性は決して一様ではない。サケやシジミの河口部の漁協では、季節的に地域の主業となる川も多い。また、溪

流釣りのメッカとなっている川も、一様に分布するわけでもない。さらには、流域面積が大きい河川の多い東北日本の河川よりも、西南日本の河川での漁業生産力が高いのはなぜであろうか。また、1河川内に複数の漁協が成立している場合、漁業のあり方に違いが生まれているのであろうか。このような地域性から河川漁業の多様性にふみこむ視点は、地理学として意味あることであろう。

②社会性の視点…河川漁協がこれまであまり注目されてこなかったのは、地域社会との交渉が限定的であって、世間の耳目を集める機会が少なかったためともいえようが、それが近年、環境をめぐる地域の動きと連動して様々なかかわりを持ち出している。ここに河川漁業地域社会の中で考える視点が生じうる。すでに各地のサケ川でみられるような漁業の地域イベント化を通じた地域交流の担い手としての意義、また近年各地で増えてきている自治体の枠を超えた流域連携活動と漁業・漁協とのかかわりも、注目されてよいテーマと考える。

③環境文化の視点…地域の環境を見直す近年の動きの中で地元河川の環境が再認識され、環境と人とのかかわりが生んだ環境文化も再認識されようとしている。漁業者が川ととり結んできた環境文化についても、斯学では既に野中(1991)の研究があり、また近年盛んになりつつある環境民俗学では出口(1996)の労作がある。しかし、川の環境文化を地域性と社会性の中で語るには、河川漁業研究の事例はあまりに少ない。釣り人の環境認知や漁場利用行動などの生態地理学的視点からの研究も十分成立しよう。

いずれにしても、河川環境への社会的関心が高まりつつある時宜をとらえ、先学に学びながら、山村・林業や漁村・海面漁業に比べて明確な地域性認識が行われてこなかった河川漁業とその地域環境に関する研究の蓄積が期待される。

謝辞 現地調査とその後の執筆にあたっては、阿武隈川漁協専従職員の間江清志氏に多大なるご教示を

いただいた。記して感謝の意を表します。

注

- 1) 「地理学文献目録」3～10巻を通覧しても、河川漁業に関する記事が地理関係誌に掲載された例は中山(1970)と野中(1991)の2件だけであり、他には本間(2003)民俗誌的著作がわずかに見出されるのみである。また「漁業経済研究」の総目次では、河川漁業に関する報告は見出しえない。さらには、著名な漁業学の入門書(能勢, 1980; 平沢, 1979)にも河川漁業への言及はない。
- 2) 総漁獲の1%程度を占める内水面養殖業のほうは、ウナギのほかコイ、アユ、金魚のような集約的産地があって、研究も蓄積されている(増井, 1999; 井村, 1992)。
- 3) 河川管理の自的に従前までの治水と利水に加えて「河川環境の整備と保全」が位置づけられ、地域の意向を反映した河川整備計画の導入が規定された。
- 4) 阿武隈川流域では、1994年10月に第1回が開催された「阿武隈川サミット」がある。これは、阿武隈川の水質悪化を憂えた福島市長の呼びかけで、福島・宮城両県の流域29市町村が参加して始まった自治体間の交流連携組織である。
- 5) この点、近年の民俗誌の労作である鈴野(1993)と環境社会学の出口(1996)の著作は注目される。前者は、全国の溪流漁にかかわる習俗が風土性の視点をも導入して広範に記載されている。後者は、新潟県の荒川の四季を通じた川と人とのかかわりを論じている。
- 6) さらに5年後の1983年には10,385人となったが、それ以後のセンサスでは組合員数は統計書に表象されなくなった。なお、1983年以後の漁業センサスにおける阿武隈川水系の諸項目では、表象数値も10人や100人単位の概数になるものがあつたり、前回センサスで多くの数値を計上した「その他の漁業」欄が空欄になったりと、信憑性に欠ける部分が少なくない。
- 7) 以下の記述内容のうち、漁協での聞き取りに基づく内容は、2004年3～8月に数回にわたって行った訪問ヒアリングによっている。
- 8) 漁協の定款では、「この組合の地区内に住所を有し、かつ漁業を営み若しくはこれに従事し、または河川において常例として水産動植物の採捕若しくは養殖をする日数が1年を通じて30日を越える個人」となっている。また、「組合の地区」は、「福島市、二本松市、郡山市(湖南を除く)、須賀川市、白河市、伊達郡、安達郡、岩瀬郡、石川郡、田村郡(都路村を除く)、西白河郡、東白河郡棚倉町の区域」と既定されている。
- 9) 河川漁業者の兼業状況に関しては、第5次センサス(1973年)で、世帯の専兼構成が都道府県別に表象されている。これによれば、福島県の河川漁業者世帯17,736のうち、河川漁業専業が5、主業が37、農業兼業が5,839、その他兼業が11,883であった。1973年にして、農業よりもその他の職業者の世帯員がはるかに多かったことがわかる。
- 10) たとえば、最も漁業者の多いアユでは、漁法とその行使者の資格が次のように定められている：
 - ・手釣り、竿釣り、たも網、友釣り、さで網…組合員であること。
 - ・投網、四ツ手網、釜、やす…1年以上組合員であること。
 - ・やな…組合員であつて上記(やな)漁業に3年以上の経験を有する者であること。
- 11) 河川漁業の漁獲量は農水省統計情報事務所による各流域漁協への質問紙調査によっているが、阿武隈川漁協では、前年の値をベースにして、一部組合員からの釣果情報や、週末の天候や他河川の釣果情報の流布に左右される釣り人の入りこみ状況を勘案して漁獲量を推定しているという。しかしながら、漁業者のほとんどが非生業的で水揚物は自家消費されることもあり、漁獲量把握の正確性はなかなか期し難いようだ。たとえば、第3図中の1980年代のコイとウグイの急増は、当時の釣果推定が過大であり、その後順次修正してきたという。また、1990年代以降のアユの急増は、放流魚体をそれまでの5gものから10～15gの成魚放流に転換したため、釣果が重量換算で増えたためという。
- 12) 1地点あたりの放流魚種と放流量が異なるので、地点密度は放流密度を示していない。また、1997年に定められたこの放流地点は、実際にはその時々

況に応じて変更されている。

- 13) 魚によって異なる単位（重量と尾数）とで計上されているため、指数で表した。
- 14) 1980年代に建設が行われていたものでは三春ダムと摺上川ダムが大規模なものであった。前者は1975年建設開始、1984年12月に補償妥結、後者は1985年建設開始、補償は1994年に行われた（東北地方建設局河川部、1988およびヒアリングによる）。
- 15) 福島県栽培漁業センターのアユ稚魚は1983年から92年まで県内の漁協に出荷されていた。その後は、漁協の求める稚魚が大型化したこともあり、中間育成業者の手を経ることとなった。現在は、センターで0.7gまで育て、全量中間育成業者に移されて、各漁協の希望にあわせた放流サイズ（10～15g）まで育成した上で、漁協に出荷される。
- 16) このほか、1995年まで漁協自ら摺上川の伏流水を利用してマス養殖を行っていたが、これはコスト高によって中止した。
- 17) 他河川からの移入卵で孵化したサケは、放流河川だけでなく産卵河川のほうにも多く回帰してしまう傾向が指摘されていることを考慮して、自川卵の放流のみ転換したものである。
- 18) 全国の河川漁協の組合員数は、1998年には冒頭に述べた通り59.2万人であるが、ピークの1983年は、63.4万人であった（漁業センサス）。

文献・web page

- 井村博宣（1989）：那賀川平野におけるアユ養殖地域の分化と要因。地理学評論，62A, pp.615～636
- 鈴野藤夫（1993）：『山漁』農山漁村文化協会，552p.
- 釣り東北社（2004）：『東北の溪流・鮎ガイドMAP』河北新報出版センター
- 出口晶子（1996）：『川辺の環境民俗学』名古屋大学出版会，308p.
- 東北地方建設局河川部（1988）：『東北のダム』
- 中山清治（1970）：寒狭川上・中流の内水面漁業。地理，15-4, pp.100～104
- 能勢幸雄（1980）：『漁業学』東京大学出版会，268p.
- 野中健一（1991）：長良川流域における淡水魚介類の漁撈と食用。地理学評論，64A, pp.244～264
- 平沢 豊（1979）：『日本水産読本』東洋経済新報社，240p.
- 本間研児（2003）：秋田県鈴木内川におけるアユ遊漁の地域的展開。秋大地理，50, pp.43～46
- 増井好男（1999）：『内水面養殖業の地域分析』農林統計協会，267p.
- アユ釣りステーション「鮎・溪流釣り場データベース」
(<http://www.kiddy.co.jp/ayunip/>)
- サケマス資源管理センター「サケ増すの放流数と来遊数及び回帰率の推移」(http://www.salmon.affrc.go.jp/zousyoku/ok_relret.htm)

Recent Change of the River Fishery and Fishery Cooperative's Role in Abukuma River

Takehiko TAKANO